

『崔陟伝』(下)

山田 恭子



天理大学附属天理図書館蔵『崔陟伝』

前回までのあらすじ

文禄の役の最中、南原に暮らす崔陟チュウシヨクは、ソウルから戦乱を避けて来た李玉英イオキョンと結ばれる。二人の間には夢積モンソクという息子も生まれるが、幸せな日々は長く続かない。折しも慶長の役が起り、一家離散となる。家族を失った崔陟は中国に渡ることを決意し、明の将校である余有文セウコウシヨウの紹興府シヨウコウフに行く。一方、捕虜になった崔陟の父と玉英の母は脱出に成功し、鷺谷寺ロンゴクサで夢積と出会う。玉英は日本に連行され、商船に乗って海を往來することになる。

趙緯韓『崔陟伝』（続き）

この時、崔陟は紹興府にいて、余公と義兄弟の契りを交わした。余公が自分の妹を崔陟に嫁がせようとしたが、崔陟は最後まで承諾せずに言った。

「私の家族は倭兵によって連れ去られ、年老いた父や、か弱い妻の生死も分からないでいるのです。死ぬまで喪服を脱げないような心境なのに、どうして新たに妻を得て温かな暮らしができませんようか」

これを聞いた余公はそれ以上話を進めなかった。

この年の冬に余公は病気になり死んでしまった。崔陟は再び行き場がなくなり、江湖¹の付近を回り、名勝地を遊覧した。竜門²と禹穴³を見ながら瀟湘江と洞庭湖⁴を遊覧し、岳陽楼⁵と姑蘇台⁶にも登った。このように崔陟は江上を遊覧しながら、詩を詠み、雲と水の間を徘徊し、ついに小さなことにこだわるより、気ままに一生を終えようと決心した。この間、海上に月の道士とされる王隠⁷という人が峨嵋山⁷に住んでいたが、不老長寿の薬を作り、白昼に昇天する術を知っていると聞いた。それで崔陟は蜀⁸の地に赴き、その仙術を学ぶことにした。

ちょうどその時、朱佑⁹という人がいて、号を鶴川¹⁰とつけたが、家が湧金門外にあった。彼は經典と史書に精通しており、立身出世に関心がなく、ただ物を売って生計を立てていたが、他人に施しをするのを好み義侠心を尊んだ。そこで崔陟が蜀に行くという便りを聞いて酒を持ってやってきた。鶴川は杯を持ち、崔陟の字^{あざな}を呼びながらいった。

「伯昇よ。伯昇よ。人がこの世に生まれたら誰でも長く生きたいと思うだろう。しかし古今天下を長く見てきたが、死なないものがどこにいるのか。いったい残りの人生がどのくらいあるか知らんが、うまい食事もせず腹をすかしてわびしい思いで山に行き、鬼神と共に暮らそうとするのか。お前さんはすぐ私のところに来て共に生きるのがよい。葉の如き小船に乗って気ままに朝夕¹¹と楚¹²を行き来し、絹と茶を売って暮らそう。そうして江湖を遊覧しながら残りの人生を楽しく過ごすのが達人の境地であり、人々のいう地仙¹³が天から舞い降りてくることだと知らないのか」

崔陟は鶴川の言葉を聞いて愕然と悟った。それで彼の言うとおりに共に遊覧することにしたが、時は折しも庚子年（1600）の晩春であった。崔陟と鶴川は船に乗って、茶を売りながらあちこち行き来し、ついに安南¹⁴に至った。この時、日本商船十余隻が入り、江に停泊しており、崔陟らも十日あまり停泊することになった。

月日はいつの間にか四月の半ばになっていた。空には雲一つなく、江の水は絹のような光沢で、風もなく穏やかだった。この日の夜更けに、明るい月光が江上に光り、霞^{かすみ}が水の上に漂っていたが、船上の人々は皆深い眠りに落ちて、水鳥だけが鳴いていた。

この時、ふと日本商船から念仏を唱える声がかすかに聞こえてきたが、その声が非常にもの悲しかった。崔陟は一人、船の欄干にもたれていたが、この声を聞いて自身の身がはかなく思えた。それですぐ巾着から笛を取り出し、何曲か演奏すると、胸中に深く根ざした恨を晴らすことができた。ちょうどその時、海と空は静かで、雲と霞が晴れて、哀切な曲調と奥深い感じが笛の音にのって清く広がっていった。これに多くの船上の人が驚き、眠りから覚め、ものさびしげに座り、笛の音に静かに耳を傾けていた。日ごろ鬱憤多き者もこの笛の音には心静まるようであった。

しばらくして日本人商船から朝鮮語で七言絶句を詠む声が聞こえた。

王子おうしきょう喬が笛を吹くに、月も降りて聞こうとするほど、
海のように青い天には、露が凜としている。

詩を詠んだ声がすさまじく、まるで怨みでも訴えかけるように聞こえた。詩を詠み終わると、その人は長くため息をついたようであった。崔陟はその詩を聞いて、愕然がくぜんとし笛を落とした。まるで氣を失うしなった人のように杲然ぼうぜんと立ち尽くすばかりであった。これを見た鶴川が言った。

「どこか具合でも悪いのか」

崔陟は答えたかったが、のどが震え声にならないまま、涙だけが流れた。しばらくして氣を確かにし、口を開いた。

「少し前に、私の船の中から聞こえてきた詩句は、そのまま私の妻が詠んだものと同じだった。ほかの人は一生あの詩を聞いても絶対分らないはずだ。それに詩を詠む声すら私の妻の声に似ているので、ひとりで悲しくなった。私の妻がここまで来てあの船にいるなんてあり得ないはずだが」

そうして家族皆が捕虜として捕とらえられたことを話すと、船にいた人たちの中で悲しまない者はいなかった。その中に杜洪とこうという人がいたが、若くて勇氣ある男だった。彼は崔陟の言葉ことばを聞いては、顔に義侠心が表れ、こぶしで竿さおをたたきながら興奮して言った。

「私が行って見てこよう」

鶴川が阻止して言った。

「この夜中に騒げば多くの者が動揺する。明日の朝、そっと聞いてみても遅くはない」

周辺の人がみな言った。

「そうしよう」

崔陟は座ったまま朝になるのを待った。東の空が明るくなると、すぐに堤に降りて日本人

商船のほうに向かって朝鮮語で尋ねた。

「昨夜、詩を詠んでいた人は朝鮮の方ではありませんか。私も朝鮮人なので一度お目にかかれたらと思います。遠く客地で暮らす者が、同じ故郷の人と出会えたのはこの上ない喜びです」

玉英も昨夜聞こえてきた笛の音が朝鮮の曲調である上に、平素慣れ親しんでいたものとあまりにも似ていた。それで夫への想いでいっぱいになり、自然と詩を詠んでいたのである。玉英は自らを探す人の声を聞いて、我を忘れて走り出し崖陟を見た。二人はお互い驚きの目で見つめ合い、一声を上げたかと思うと、浜辺で崩れ落ちるように抱き合った。

のどが締め付けられるようで、気でも狂ったかのようにになり、まともな言葉は交わせず、目からは涙があふれ、お互いの顔を見ることすら出来なかった。二国の船頭が、何事かと集まり見ていたが、始めはただ崖陟とその親しい友達かと思っていた。後に二人が夫婦であることを知り、人々は皆、二人を眺めながら声を上げた。

「なんという不思議なことだ。これこそ天の思召し、人力でなせる業ではない。古今東西聞いたこともない」

崖陟は玉英にその間の消息を尋ね聞いた。

「山の中で捕まり、川辺につれてこられたと聞いたが、その時、父と母はどうなったのだ」
玉英が言った。

「日が暮れた後で船に上がったので、お互い行方が分からなくなり、お二人の安否を知る間もなかったのです」

二人は手を携え慟哭すると、横で見ていた人々も悲しそうな表情で涙を流した。

鶴川は頓于に会い、白金^{プラチナ}三つの塊を見せながら玉英を購い連れて行く旨を話した。すると頓于は顔を真っ赤にして言った。

「私が沙于に会ってから四年が経ちましたが、その端正で清い心を愛し、本当の子供のように接してきました。それで寝食をともにしてまいりましたが、今まであれを男の子だとばかり思っていたのです。今日、話を聞いたのですが、これは天地神明ですら感動することでしょう。私はたいした学もないですが、人心も分からぬ岩木ではございません。どうして沙于を他に売り渡して生きるような真似が出来ましょうか」

頓于はすぐ袋の中の銀貨十両を出して餞別金として与えながら言った。

「四年を共に暮らしたが、突然の別れになった。悲しい心で胸がいっぱいだが、苦勞の末に生き残り、再び夫に会ったことは本当に奇異な運命で、今まで聞いた事がない。私がお前を引き留めたら、天が必ず私を罰するだろう。沙于よ、元気だな」

玉英が手を上げて、感謝の言葉を述べた。

「保護してくださったおかげで今まで死なずに生き延び、思いもかけず夫に再会いたしました。それに心から祝福してくださり饞別までいただいて、このご恩は決して忘れません」

崔陟が玉英と共に元の船に戻って来ると、隣の船から二人を見に来る人々が列をなし、中には金銀や絹をくれたりもした。鶴川は家に戻り別途一室をきれいに掃除し、崔陟と玉英をそこに住ませた。

崔陟はすでに妻に会ったのでこれ以上望むものはなかった。しかし遠い異国の地での生活だったので、どこを見渡しても親戚がなかった。それで、いつも年取った父と幼い息子への思いで、涙の乾く暇もなかった。

崔陟は遠い異郷でこれ以上生きる気力がなくなり、生きて故郷に帰れるようにと黙々と祈祷した。

しかし歳月が流れ、崔陟はまた息子を産んだ。息子の名前を決める前に、丈六仏がまた夢に現れて言った。

「今度、生んだ息子の背中にも赤いあざがあるだろう」

崔陟夫婦は仏に感謝し、夢釈の生き返りだと思い、名前を夢禪モンソンとつけた。夢禪が成長し、よき妻を娶ろうとした。隣の陳家に娘がいたが名前を紅桃ベニトウといった。紅桃が乳を飲まなくなる前に、父の偉慶イケイ¹²は劉摠兵リュウソウヘイ¹³に従い朝鮮に出戦し帰って来ず、成人する前に母親もなくなってしまったので、紅桃は叔母の家で育てられた。紅桃はいつも父親が他国で死んだことを悲しみ、この世に生まれ、父の顔も知らない自分の運命を恨んだ。それで父が死んだ国である朝鮮に一度行って霊を招き慟哭し、死体を持ち帰り葬式を行うのが夢であった。紅桃は恨みを骨と胸に刻んだが、女であるがゆえに、簡単に朝鮮に渡ることも出来なかった。それで夢禪が嫁を探していると聞いて叔母さんに仲人をお願いして言った。

「私の一生の願いは、崔氏の妻となり、一度朝鮮に行って心中の恨みを解くことです」

紅桃の叔母はもとより紅桃の志を知っていたので即座に崔陟に会い、姪の考えを大体話し、婚礼を挙げてくれるよう頼んだ。崔陟夫婦は非常に喜んで言った。

「若い女子でもこのような志があるのに、われわれがどうしてその心がなかるうか」

ついに崔陟は紅桃を嫁に迎えた。

翌年の戊午年(1618)に後金ゴコン¹⁴の努爾哈赤ヌルハチ¹⁵が遼陽リョウリョウ¹⁶に侵攻してきたので引き続いていくつかの陣地を陥落させ、数多くの将兵を殺した。怒った天子が全国の兵士を動員して、これを討伐させた。蘇州人である呉世秀ウセウ¹⁷が、喬遊撃キョウユウゲキ¹⁸の副摠兵として出戦したが、かれは以前に余有文の指揮下に属し、崔陟が才能と勇気のある人物だと知り、書記として従軍させることにした。崔陟は仕方なく、荷物をまとめて出発しようとした時、玉英が手をつかんで泣きながら別れの言葉を交わした。

「私は、まことに不運なことに家族離散の苦勞の中、なんとか命だけは守ってまいりました。天の助けで幸いあなたに再会し、切れた赤い糸を再び結ぶことが出来たのです。また老いたにもかかわらず息子まで得て、二十四年間をともに生きてきました。過ぎ去りし日々を振り返りますと、いまや死んでも恨みはございません。私はいつでも君の恩に答える覚悟でございますので、老いても何の心配もございません。しかしまたこのように別れることになり、まして何千里も離れた遼陽に行かれるとなると再び生きて会うことは難しいと存じます。願わくは、この場で自害することで、君の私を思ってくださいる心を少しでも楽にいたし、昼夜断腸の思いである自らの苦惱も絶ちたく存じます。嗚呼！今や永遠の別れとなりました。千金にも値する体どうかお大事にしてください」

玉英は言葉を終えるや刀で首を刺そうとした。崔陟は刀を奪い言った。

「つまらぬ蛮族の頭が腕試ししようとするのを、帝王の軍隊がきれいさっぱり追ひ払おうというわけだから、どうなるかは日を見るより明らかなだ。遠い異郷に従軍したとってどうして皆必ず死ぬなどと考えるのだ。どうか心配したり苦しんだりしないでくれ。私が功をあげて帰ってきたら中堂に酒の宴を設け祝おう。まして夢禪は一人前になったから頼るのに十分だ。できるだけたくさん食べて体を大事にし、これ以上心配をかけさせないでくれ」

ついに崔陟を含めた明の軍隊が出発し遼陽に至った。ここで後金の領地まで数百里歩き続け、朝鮮の軍隊と共に牛尾塞¹⁹に入り陣を張った。しかし主将が敵を軽く見て戦ったので、全軍は大きく敗退した。後金の兵は明の兵士を皆殺戮したが、朝鮮兵には誘惑したり、威嚇したりするだけで、一人も殺さなかった。それで明の強兵が部下十余名を連れて朝鮮兵の陣内に入り朝鮮服を請うや、朝鮮の将軍である姜弘立²⁰は残りの服を与え殺されないようにした。

ところが従事官²¹の李民實²²がこのような事実が後金軍にばれはしないかと恐れ、服を奪い、明兵をとり捕まえ、敵陣に送ってしまった。崔陟はもともと朝鮮人であったため、すきを見て明の列からこっそりはずれ死を免れた。ついに姜弘立が投降すると崔陟は朝鮮の将卒たちと共に後金の牢に監禁された。

この時、夢積も南原から武芸に励み、出戦して將軍の陣中にいた。後金が降伏した兵隊を捕虜として牢に入るよう指示していた時、崔陟は夢積と偶然同じ所になった。それによって父子が再会することになったが、崔陟と夢積はお互いに親子であることも知らずにいた。夢積は崔陟がとつとつとした朝鮮語で話すのを見て、朝鮮語の出来る明兵だと思い、彼と一緒に殺されるのではないかと恐れた。それで、ついにどこから来たのかと尋ねることにした。崔陟もまた、ひょっとして後金のスパイが探りを入れているのかと疑い、全羅道や忠清道にいたと、あやふやなことを言った。夢積はますます変に思ったが、それ以上の事実は知

ることも出来なかった。

すぐ何ヶ月かが過ぎて崔陟と夢積とは次第に親しくなり、お互い同病相哀れむ立場であったため、少しも疑ったりしなくなった。崔陟はついに自分の生涯のすべてをありのまま告げた。夢積は崔陟の言葉を聞くや顔色を変え、悲しいような嬉しいようなどうしようもない様子で、急に尋ねた。

「失った子は年がいくつで、容貌はどんな感じだったのですか」

崔陟が答えた。

「甲午年(1594)十月に子を産んだが、丁酉年(1597)八月に失ってしまった。その背中には赤いあざがあるのだが、まるで子供の手のひらのような形をしている」

夢積は言葉も出ず、驚き倒れ、上着を脱いで背中を見せながら言った。

「私がまさにその子です」

崔陟はようやく夢積が自分の息子であることを確認した後、父親と沈氏の生死を尋ね、生きていくことを知ってから、喜びと悲しみが交互し、お互い抱きしめ合い慟哭した。見張りの老いた後金の者がしきりにやって来て、その光景を見つめ、言葉を聞き取れたかのように、哀れみ深い表情をつくっていた。ある日は、後金の若い兵が皆外に出たすきに、その老人がこっそりやって来て、その場に座って言った。

「お前さんたちがお互い抱き合って慟哭するのは、なにか悲しい事情があるのだろう。いったいどんなことがあったのか」

崔陟と夢積は老人が秘密を探ろうとしているのかと考え、その場で返事が出来なかった。するとその老人が言った。

「お前さんたちは私を恐れなくてくれ。私はもともと新義州の北側の朔州^{さくしゅう}²³で土兵²⁴をしていたが、牧使²⁵の暴政に耐えられず、家族を引き連れこの土地に入ってきたのさ。ここに来てからすでに二十年にもなるが、後金族の者は性格が率直で過酷に収奪することもない。人生は朝夕露の如くなのに、そうまでして苦節を経て、故郷にこだわり生きるのに何の意味がある。だから家族をつれてこの土地までやってきたのだ。後金の長は私に兵士八千名をつけ、朝鮮兵が逃げないように見張りをしろと言った。今言い合っている言葉を聞くに、大変奇異なことようだ。たとえ罪を得たとしても、どうしてお前さんたちを逃してやらないことがあろうか」

ついに老人は、食料を準備し、道を教えながら崔陟と夢積を逃してやった。

これで崔陟は夢積をつれて生きて故郷に帰れることになり、真っ先に父親に会いたい気持ちで、南方へ向かった。しかし途中で背中に腫れ物ができ治療もままならなかった。恩津^{ウンジン}²⁶に至り腫れが更にひどくなり、これ以上動けなくなった。宿所に留まったが、崔陟は息も絶

え絶えになった。夢積は焦る心であちこち走り回り、針灸と薬を探したが、ちょうど身元を隠し逃走していた中国人が、湖南から嶺南ホナム ヨンナムに行く途中で、崔陟の様子を見て驚いて言った。

「一日でも遅ければ命が危なかっただろう」

中国人はすぐ袋から小さな針を取り出し、傷の入り口に刺した。そうして崔陟は次の日ようやく回復に向かった。

数日後に崔陟が杖をついて故郷の村に帰ってくると、その痛々しい姿に、家族全員があこの世から蘇よみがえったものを見るかの如く驚いた。祖父、父、孫の三代がお互い手をつないで抱きかかえ合いながら、のどが枯れるまで慟哭した。みんな酔ったように、夢か幻かといった様子だった。沈氏は娘を失った後、魂が抜けたようになり、ただ夢積の無事帰還を待ちわびたが、北方に遠征した兵士がみな死んだというわさを聞いてからは、病状が更に悪化した。それで何ヶ月かわずらい起きてもらえなかったが、夢積が崔陟と一緒に帰ってきて、さらに玉英がまだ生きているという消息を聞いて、狂ったように声を上げ、悲しみと喜びでいっぱい表情だった。

夢積は父を助けてくれた中国人の恩に感謝し、厚くお礼しようと彼を連れて来た。崔陟は家族との感激の再会を果たし、中国人に尋ねた。

「貴殿は中国からいらっしゃったそうだが、お国はどちらでお名前は」

中国人が答えた。

「私の姓は陳、名は偉慶で、家は杭州²⁷の湧金門外ゆうきんもんがいにあります。丁酉年（1597）、朝鮮に遠征に来た後、劉提督²⁸の指揮下にいました。劉提督は順天²⁹スンチョンに陣を張りましたが、ある日私が敵勢を探りに行き、將軍の命にそむく結果になりました。將軍が軍法通り罰しようとしたので、夜にこっそり逃げ出してここにとどまることになったのです」

崔陟がこの言葉を聞いてたいそう喜んだ。

「お宅にはご家族がいますか」

中国人が言った。

「家には妻と娘が一人おりましたが、娘は私が発つとき、生まれて数ヶ月でした」

崔陟がまた尋ねた。

「娘さんのお名前は」

「娘が生まれる時、ちょうど隣の人が桃をお祝いにくれたので、名前を紅桃とつけました」

崔陟が急にその手を取って言った。

「まったく、なんと言うことだ。私が杭州でお宅の横の家に住んでいたのです。あなたの夫人しんがいは辛亥年（1611）九月に病で亡くなり、紅桃だけ一人残され、叔母さんの吳鳳林宅ごほうりんで育てられ、私の次男の嫁になったのです。それで思いもかけず今日ここであなたに出会えたと

は、本当に奇異なことです」

偉慶がこの言葉を聞いて、彼の家族に再会したかのごとく喜んだ。その一方で悲しみがこみあげ、しばらく慟哭せずにはいられなかった。

「私は嶺南の大邱³⁰で朴氏姓をもった人の家でお世話になり、針灸で生計を立てておりました。今やあなたと姻戚関係であることが分かった以上、ここに移って一緒に住みたいと存じます」

夢積が言った。

「公は私の父の命の恩人だけでなく、一番近い姻戚でもあります。また私の母や公の娘と結婚した弟が家族として生きているのに、いまさらなにをおっしゃいますか」

そしてすぐに偉慶を隣家に住ませた。

夢積は母が生きているという言葉を知ってからは、朝夕中国に行き母と弟をつれてこうと思った。それで妻と共にあれこれ考えたが、これといった良策がないままであった。

当時、玉英は杭州で官軍が全滅したと聞いたので、崔陟も陣中で一緒に死んだものと思いい、朝夕慟哭し、最後には自殺しようとした。すると夢に丈六仏が現れて告げた。

「死んではならぬ。後で必ず良いことがあるだろう」

玉英が眠りから覚めて夢禪に夢の話をしながらか言った。

「私が日本に捕虜として行った時、何度か海に身を投げ死のうと試みましたが、ついには南原万福寺の丈六仏が夢に現れ、死んではならぬとおっしゃいました。それから十年後に安南の海辺でお父様に再会できたのです。今も死ぬことを考えましたが、また同じ夢のお告げがありました。お前たち兄弟を生み育てたのも、すべてこの丈六仏のお導きによるものだから、お父様がどこかで生きている証拠でしょう。万一生きているとすれば、私の死を恨めしく思うに違いありません」

夢禪が言った。

「今聞くとところによると、後金の酋長^{しゅうちょう}は明の兵士を皆殺しにしましたが、朝鮮人は死を免れたといえます。お父上は本来朝鮮人であるゆえに間違いなく生きておられるでしょう」

玉英が急に心を決めていった。

「後金の酋長の巢窟が朝鮮の国境から歩いて十日ほどの距離にある。万一、お父さまが生きていらっしゃるのなら、その様子を見て抜け出し、必ず本国に帰っているに違いない。私が本国に探しに行かなければ。もし戦死していたなら、私が自ら昌州^{チャンジュ}³¹に行き屍身を尋ね、魂を収め、故郷に帰って、先祖の山で葬儀を執り行い、無事成仏できるようにせねば。越国の鳥は南方を想い、胡族の馬は北方に向かう³²というが、禽獣ですらそうなのに、まして人の心が故郷を思わないはずがない。今まで私は異国で暮らしたまま、余命いくばくもなし。

だからよけいに故郷に対する恋しさでいっぱい。老いた舅や母と別れ、懐にいた幼いわが子さえ失い、生死すら分からないとは。この頃、日本の商人たちから聞くとところによると、捕虜になった朝鮮人たちが故国に戻っているとか。これが事実だとすれば、生きて帰っている可能性もある。お父上がもし異国の地で死んだとすれば、今誰が再び先祖の廟を守るのか。内外の親戚たちが戦争で皆死んでいたら結局お守りする人はいないであろう。おまえは今すぐ船を一隻買い、食料を準備なさい。ここから朝鮮まで水路でわずか二、三千里。天が見守ってくれ、順風ならば十日もかからず祖国に戻れましょう。私は発つことに決めました」

夢禪が泣きながら言った。

「母上はどうしてそのようなことをおっしゃいますか。もし順調にわたることができたとしたらそれはまことに天恩でしょう。しかし広い海を小船で渡ることはできません。風や波、鰐や鮫がどんな災難をもたらすかも分からないのに、まして海賊船があちこちで活動していると聞きます。母上と私が水の中に落ちて死んだとしたら、お帰りになった父上に対して何の助けになるというのですか。私は愚か者ではありますが、大事を目の前にして強いてこのようなことを言うのは、情勢が油断ならないからです」

横にいた紅桃が夫に言った。

「あなた、これ以上は、反対なさらないで。時の運があるというのに、あれこれ心配して何になるというのでしょうか。お母様が決心なさったことですし、恐れることなどございませぬ」

玉英が言った。

「水路は険しいが、私がすでに経験をしておる。昔日本にいた時、船を家とし、春には閩^{びん}広^{こう}で商売をし、秋には琉球で物を売ったから、常に荒い波にもなれており、星や潮水の流れから運勢を占えるほど経験が豊富というもの。荒い波でも舵を取り、船の安全も私が見る。まさか不幸なことが起きてもなんとか克服できよう」

玉英はすぐに朝鮮と日本の二国の衣装を作り、毎日息子と嫁に二ヶ国語を教え学ばせた。そして日々、計画と関連した注意を夢禪に与えながら言った。

「航海がうまくいくかいかないかは、ただ帆^ほ舵^{かじ}にかかっている。帆はきっちりと舵は強固でなければならない。また必要なものは羅針盤である。航海する日を決めるから私の言う通りにしなさい」

夢禪が心配でいっぱいなまま引き下がり、ひそかに紅桃を叱りながら言った。

「母上が命を投げ出し、死路の航海の計画を立て、危険な海を渡り朝鮮に行こうとなさっている。それなのに君はこのことに賛成のみならず、母上と意見を同じくし、私の立場を顧

みないとは、まったくひどいことだ。父上がすでに亡くなったかも知れぬのに、母上まで見殺しにするつもりか」

紅桃が言った。

「お母様が計画をお立てになったのは本望によるものです。とやかく言って止められるものではありません。悔やんでも悔やみきれない後悔をするかと心配にもなりますが、今はお母様の計画通りにするのが最善です。これ以上、私に言わせないでください。生まれて数ヶ月で父が異国で戦死し、骨も埋められず草原に散らばっているのです。母も私が幼いころに亡くなってしまいました。それで私はこの世に生きる希望もなくなりました。しかし最近巷^{ちまた}で聞くに、戦場から負けて帰ってきた軍隊の中に朝鮮から脱出してきた者も多くいるそうです。娘として幸運を祈らずにはおれません。万一、あなたの力を頼って朝鮮にたどり着き、一度戦場跡を尋ね、父をしのんで杯でもあげたら、惨めにさまよう魂の慰めになることでしょう。そうすれば私の長年の恨みが晴れ、朝に生き夕に死んだとしても悔いはありません」

紅桃は言葉を終えるとさめざめと泣き出した。夢禪はようやく母と妻が同じ心で事を決行しようとしていることを悟り、今さら曲げることはできないと考えた。それで出発の準備をし、庚申年(1620)二月の初めに帆を揚げ出航することにした。出発する日が決定すると、玉英が息子に言った。

「朝鮮は北東方面にあるから必ず南西風を待たねばならぬ。座って、竿をしっかりと握り、私の指示に従うように」

ついに旗竿に旗を揚げ、磁石を船の横に設置した。船の中を点検してみると、すべてのものが準備完了していた。イルカが水を抱き、鯨が波を上げたが、風が空中で起こり旗が北の方へ向かってなびいた。三人が力を合わせて帆を揚げると船が夜昼なく波を分けて疾走した。稲妻のような矢が波浪の中に入って行くが如く、あつという間に萊州^{らいしゅう}³¹に到達した。いくばくかして青い大海に浮かぶ島々が現れたが、目に入るや遠ざかり消えていった。ある日は中国人の船に出くわし、彼らが言った。

「どの地方の船で、どこに行くのですか」

玉英が答えた。

「私どもは杭州人ですが、お茶を買うために山東に行く途中です」

また何日かして日本人の船がやってきた。玉英はすぐに息子、嫁と共に日本人の服に着替えて待っていた。日本人の船が近づいてきて尋ねた。

「どの地方の方で、どちらから来ているのでしょうか」

玉英が日本語で答えた。

「魚を捕まえに海に出てきましたが、波浪にあい漂流してしまいました。船舵が壊れてしまい、杭州で船を買って、帰国する途中です」

日本人が言った。

「ご苦労なことが多かったのですね。ここから日本まですぐだから南方に向かってください」

この日、南風がひどく吹いていた。しばらくして太陽が西の海に沈むと、白い海蛇が風浪を立て青い波が空に巻き上がった。雲と霧が四方を塞ぎ、すぐそばも良く見えず、竿は折れ、帆は破れ、どこに行くべきなのかも分からなかった。

夢禪夫婦は驚き、船底にへばり付いていたが、すぐに船酔い^{きぜん}をし始めた。玉英は毅然として空を仰ぎ言葉もなく祈った。夜になって波風がおさまり、流された船は小さな島にたどり着いた。

船を修理するために何日か留まったが、忽然と海の中から一隻の船が次第に近づいてきた。

玉英は夢禪に船中の装備を袋に入れて岩のくぼみに隠すように言った。しばらくして船の人たちが、騒ぎながら降りてきた。言葉は朝鮮語でも日本語でもなかったが大体中国語と似ていた。彼らは手に武器を持っていなかったが、白い棒を打ちながら貨物を出すように要求した。これに玉英が中国語で答えた。

「私は中国人で漁業をするために海に出たが、漂流してここに停泊することになったのです。貨物など最初から持っていません」

玉英が涙を流しながら命だけは奪わないように哀願した。すると彼らは殺すことなく玉英が乗っていた船を奪い、自らの船の後尾に結び付けて持ち去ってしまった。

それらが立ち去った後、玉英は夢禪夫婦に言った。

「やつらは海賊に違いない。私が聞くと、海賊の島が朝鮮と中国の間であって、随時出没して財物を略奪していくが人は殺さないと聞いている。やつらがまさにその海賊だったのだ。私が夢禪の言葉を聞かず出航し、天佑もなくこんな目にあうとは。すでに船を失い、いまさら何を言っても遅い。暗い空と広い海を飛び超えるわけにもいかず、竹葉やいかだに乗って渡ることもできず、ただ死を待つしかない。私はすでに死んだも同然の身であるからかまわないが、お前たち夫婦が愚かなこの母のせいで命を落とすとは、まことにすまぬこと」

言葉を終えると玉英が夢禪夫婦と共に悲しく泣くので、その声が非常に凄まじかった。海辺で結ばれた恨みが、波に乗って重なり合い、海神が寂寂たる波浪を寄せ、山の鬼神が顔を歪ませ呻いているようであった。玉英が海岸の絶壁から海に身を投げようとするや、夢禪夫婦が共に引きとめた。玉英は夢禪のほうを見ながら言った。

「死ぬのを止めないでくれ。これ以上何を待つというのか。袋に残った食糧はわずか三日分しかない。座って食糧が尽きるのを待つまで生きてところでどうにもならぬ」

夢禪が言った。

「食糧が尽きた後で死んでも遅くはありません。その間に生きる方法が見つかるやもしれないのに、今死んだら、後から後悔することになるでしょう」

夢禪はついに母を促し、丘から降りて、なんとか岩の洞窟に横たえ休ませた。しばらくして眠りから覚めた玉英が夢禪夫婦に言った。

「気も落ち、体も疲れ、ふと寝入ってしまったが、夢に丈六仏が現れ、また良い兆しがあるそうだ。本当に不思議なこと」

三人はお互い顔を見合わせ、喜びながら黙ったままお祈りをした。何日か後、海の彼方から帆船がプカプカと浮いているのが見えた。これに夢禪が驚いて言った。

「これまで見たこともないような船が海の真ん中に浮かんでいます、非常に心配になります」

玉英がそれを見て喜んで言った。

「心配せずとも良い。われわれは助かった。あれは朝鮮の船だ。少し待てばすぐ分かるだろう」

玉英らは楊やなぎを焼いて煙を出し、岸に上がり、服を大きく振った。そして皆朝鮮服に着替えた後、岩の上に並んでいた。朝鮮人たちが船を止めて尋ねた。

「お前たちは何人だ。なぜこんな離れの孤島に来ているのだ」

玉英が答えた。

「われわれはソウルの両班ですが、羅州ナジュ³⁵にきた際、急に波浪に会いまして、船は転覆、人々は皆溺れ死にました。ただわれわれ三人だけが帆にしがみ付いて漂流し、ここにたどり着いたのです」

船の人たちは憐れに思い、三人を乗せて帰航しながら言った。

「この船は統制使³⁶の貿易船として食糧を積んでいく船です。官家の日程が決まっており、ソウルに行くことはできません」

順天に至るや、船を橋近くに停泊させ、三人を降ろしていった。この時が庚申年こうしん(1620)四月だった。玉英一行は五、六日間歩き、南原に到着した。玉英は心中、家が戦いくさでなくなってしまったと思い、その跡だけでも探そうと考えた。感慨に浸り、辺りを見渡し、まず万福寺へと向かった。金橋の横に来て座ると、城郭がくっきりと見渡せ、村の様子や家も以前と変わりなかった。玉英は夢禪を見て指をさしながら言った。

「あれがお前の父の家だったが、今は誰の家になっているのやら。一緒に行って一晩泊ま

り、話を聞いてみよう」

玉英一行が立ち上がり、その家の門前になると、崔陟とその父が柳の下に座っていた。舅と嫁、夫と妻、父と息子、兄と弟が、驚きの目で互いに抱き合いながら慟哭した。

陳偉慶も来て、自分の娘と邂逅し、沈氏も慌てふためき駆けつけ、玉英を抱きしめ慟哭しながら気絶してしまった。すべてが夢のようであり、この世のこととも思われず、悲しみと喜びが交互に押し寄せた。この光景を見た隣人たちがあちこちから集まり、最初はその奇妙さをいぶかしがったが、後で玉英と紅桃から今まで経てきたことを詳しく聞いて、皆驚きと共に祝福し、お互いに言い伝え、話が四方に広まった。玉英が崔陟に言った。

「われわれが今日このように出会えたのも、実に丈六仏が暗に恩を施してくださったからだ。今、このご恩返しに参らねばならぬでしょう」

この言葉に崔陟と玉英は、二人の息子と嫁を引き連れ、盛大に供物を携え、万福寺に行き、心をこめてお参りした。

以後、崔陟と玉英は父母によく仕え、息子や嫁たちの世話をし、西門外の昔の家に住んだ。陳偉慶も紅桃の傍にいて、崔陟の家で一緒に暮らしながら苦楽を共にした。

南原府尹^{フユン}³⁷がこの話を聞いて朝廷に上疏し、崔陟は特別に正憲大夫³⁸の位を与えられ、妻の玉英は貞烈夫人^{ほう}に奉ぜられた。二年後、辛酉年^{しんゆう}（1621）³⁹に、夢積と夢禪はそろって武科に合格した。後に夢積は湖南兵馬節度使^{ホナムビョンマチョルドサ}⁴⁰に、夢禪は海南県監^{ヘナムヒョングム}⁴¹になった。この時まで崔陟夫婦は長生きをし、家族皆が榮えある地位に就いたので、まことに珍しいことよ。

注

- 1 揚子江と上流にある洞庭湖をさす。
- 2 中国河南省洛陽市の南にある龍門洞窟をさす。現在世界遺産に登録されている。
- 3 中国浙江省紹興県会稽山にある禹帝の廟、大禹陵をさす。
- 4 中国湖南省の瀟水と湘江の流域をさす。これらの川が集まり洞庭湖をなし、景勝地として有名である。
- 5 湖南省にあり、景勝地として有名で、ここから洞庭湖を眺めると素晴らしいとされる。
- 6 中国江蘇省の蘇州にある。春秋時代の呉王夫差が築いた姑蘇台をさす。李白が「蘇台覽古」を詠んだことで有名。蘇州は科挙試験での首席合格者を多く輩出した文化的土壤がある。
- 7 四川省樂山市峨眉山市にある山で、本文には「峨眉青山」とある。異本には「青城山」もある。青城山は中国四川省成都市都江堰市にあり、道教の聖地として有名で、峨眉山

- とともに世界遺産に登録されている。
- 8 揚子江上流にある山西省をさす。
 - 9 春秋時代の呉と楚をさす。呉は現在の揚子江下流、蘇州周辺をさし、楚は浙江省紹興の周辺をさす。
 - 10 道を体得して仙人になった人をさす。
 - 11 越南すなわちベトナムをさす。
 - 12 未詳。
 - 13 明軍の摠兵、すなわち指揮官をしていた劉^{りゅうえん}縉をさす。文禄の役では副摠兵、慶長の役では摠兵として日本軍と戦った。1619年に後金との戦いで戦死する。
 - 14 清の前身。満州族、すなわち女真族による国。
 - 15 清の初代皇帝の努爾哈赤をさす。
 - 16 中国遼寧省の瀋陽の南方にある都市。1621～1625年には努爾哈赤が都とした。
 - 17 未詳。
 - 18 明の武臣、喬一琦をさす。劉縉とともに後金軍と戦ったが、敗北して自殺した。遊撃は武官の官職名をさす。
 - 19 中国遼寧省丹東市寛甸満族自治県牛毛塢鎮をさす。
 - 20 姜弘立(1560～1627)は、1619年に明の援軍要請を受け、朝鮮から出兵し、寛甸で明軍の劉縉らと合流した。後に後金に敗れると投降し、やむを得ず出兵した事情を後金側に告げた。これは情勢をみて寝返るように密かに王命を受けたことによるが、朝廷からは非難を受け官職を剥奪された。
 - 21 通信使を遂行していた臨時の官職で従六品に相当。各軍營や捕盜庁に属していた。
 - 22 李民實(1573～1649)は、1618年に平安道觀察使であったが、姜弘立の指揮下に出陣した。後金の捕虜になったが、降伏を拒否したまま、1620年に釈放され、平安北道の義州に戻った。
 - 23 平安北道西部にある朔州郡の中心地をさす。
 - 24 土着の兵士。
 - 25 牧に派遣された地方官で、觀察使に次ぐ正三品の官職。
 - 26 忠清南道論山市にある地名。
 - 27 浙江省の省都。上海の南西部に位置し、湧金門の遺跡がある。
 - 28 劉縉をさす。注13参照。
 - 29 全羅南道の南東部にある都市。
 - 30 慶尚北道の道庁所在市をさす。

- 31 平安北道の北西にある昌城をさす。
- 32 「越禽思南 胡馬依北」で、越は今の広東省を、胡は中国北方の遊牧民のいる匈奴をさす。北に渡った広東省の鳥は南方に巣を作り、南に渡った匈奴の馬は北方に向かうという意。『文選』所収の古詩 19 首の「行行重行行」にある句「胡馬依北風 越鳥巢南枝」による。
- 33 福建省、広東省、広西の一带をさす。
- 34 山東省にある地名。
- 35 全羅南道の中西部に位置する都市。光州の南西部に当たる。
- 36 忠清道、全羅道、慶尚道の水軍を統率する官職。
- 37 府尹とは地方長官をさす。文官の外官職で従二品に相当する。
- 38 正二品に相当する。
- 39 順天到着が庚申年（1620）であることから、辛酉年（1621）は二年後ではなく、翌年に当たる。この後日談は、天理大本だけにみられる特徴である。ソウル大本は以下のようになり、何らかの理由で「辛酉閏二月」が、天理大本の「後二年辛酉」という句に変化し、後記が後日談になったと考えられる。「陟與玉英 上奉父母 下育子婦 居于府西旧家 噫 父子夫妻兄弟舅姑 分離四国 悵望三紀 經營賊所 出沒死地 畢竟団会 無一零落 此豈人力之所致 皇天后土 必感於至誠 而能致此奇異之事 匹婦有誠 天且不違 誠之不可掩 如是夫 余流寓南原之周浦 陟時來訪余 道其事如此 請記其顛末 無使煙没 不獲已 略舉其槩 天啓元年辛酉閏二月日 素翁題 素翁趙緯韓号 又号玄谷」（ソウル大本『崔陟伝』）
- 40 各道の陸軍を指揮する従二品の武官職をさす。
- 41 地方行政区域の最小単位である県の長官で、従五品の外官職をさす。

参考文献

- 天理大学図書館蔵『金華寺記』今西春秋図書（今西文庫本）
ソウル大学図書館蔵『崔陟伝』（一蓑文庫本）
朴鐘鳴 訳注『懲愆録（東洋文庫 357）』（東京：平凡社、1979）
簡鍋允『朝鮮後期筆写本漢文小説集 先賢遺音』（ソウル：이회문화사、2003）
朴熙秉 標点・校釈『韓国漢文小説校合句解』（ソウル：소명출판、2005）
閔泳大『趙緯韓과 崔陟伝』（ソウル：亜細亜文化社、1993）
閔泳大『趙緯韓의 삶과 문학』（ソウル：国学資料院、2000）
李相九 訳注『17世紀愛情伝奇小説』（ソウル：月印、1999）